

Association between Maternal under-reporting of Food Questionnaire and some factors in pregnant women, C-MACH

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大竹, 正枝, 渡邊, 応宏, 櫻井, 健一, 森, 千里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3300

Association between Maternal under-reporting of Food Questionnaire and some factors in pregnant women, C-MACH

○大竹正枝¹⁾、渡邊宥宏¹⁾、櫻井健一¹⁾、森千里^{1), 2)}

1) 千葉大学 予防医学センター

2) 千葉大学大学院医学研究院 環境生命医学

【目的】妊婦の栄養状態は、胎児の成長や将来の生活習慣病の罹患率の上昇と関連があると考えられている (DOHaD 仮説)。妊婦の適正体重の管理は母子の健康に不可欠であり、そのため母体の栄養状態を知る有効な手段として食事調査が行われている。しかし、回答には過少・過大評価の存在が報告されている。その要因として、身体的、心理的、文化的要因が存在すると考えられるが、その要因について日本における研究報告は少ない。そこで、本研究は食事量の過少評価する集団の幾つかの要因について検討した。

【方法】Chiba Study of Mother and Child Health (C-MACH) でリクルートした参加者 (n=434) のうち、母親の年齢、BMI、食事調査のデータ欠損者を除き、334 名を本研究の解析対象者とした。母親の年齢および BMI は質問票から転記し、食事調査は Brief-type self-administered diet history questionnaire (BDHQ) を用いて行った。申告値のエネルギー摂取量と推定エネルギー必要量との差が 500kcal/day 以上少ない値を示した対象者 (n=294) について、妊娠初期から妊娠後期までの時点で、体重増加が 7kg 未満 (以下、7kg 未満群 ; n=107) と 7kg 以上増加 (以下、7kg 増加群 ; n=187) の 2 つのグループに分けた。統計解析には、IBM SPSS Statistics version 23 (日本 IBM) および Excel 統計 (マイクロソフト) を用いた。

【結果および考察】申告されたエネルギー摂取量が推定消費エネルギー量よりも 500kcal 以上少ない群において、体重が 7kg 以上増加しているグループでは、本当の摂取エネルギー量が申告したものよりも多いと推定される。7kg 未満群と 7kg 増加群とでは、年齢 (p=0.010) および BMI (p=0.010) で有意な差が認められた。また、社会的経済要因の影響を見るために、この 2 つの群のグループ区分を従属変数とし、BMI、年齢、申告エネルギー摂取量、母の学歴、世帯年収を共変量に 2 項ロジスティック解析を行った。BMI および年齢は体重増加に影響が見られたが、母の学歴および世帯年収は認められなかった。

【結論】食事量の過小評価をする集団は、BMI の値が高く、年齢が若い傾向にあった。本研究では、母親および世帯年収は母親の体重増加への影響が見られなかったのは、n 数が充分でなかった可能性もある。また、今回の対象者の中には身体活動量が少ない者、また多い者も含まれている可能性があるため、その点については今後の課題とする。本研究成果は、母体の適正体重の維持を目的とした食事指導介入に役立つものと期待される。